

「人が集まることが NPO の基本、

参加したくなる “余白、づくりを”

起業支援アドバイザー 山根真知子さんインタビュー

山根真知子さん【プロフィール】

パルシステム・セカンドリーグ 起業支援アドバイザー

30 年以上、生協運動に関わってきた経験を生かし、パルシステム・セカンドリーグの立ち上げに参加。NPO 法人設立や地域起業を目指す女性たちの後押しをしてきた。現在は「認定 NPO 法人 芸術と遊び創造協会」理事。その他複数の公益社団法人や認定 NPO 法人の理事を兼務。

私たち NPO 法人スーリールファムは、生活協同組合パルシステムを母体とする特定非営利活動法人セカンドリーグ神奈川が開催した「コミュニティカフェ起業塾」の修了生が核となって 2017 年に立ち上げました。

そこで講師と受講生として出会い、現在まで、時に厳しく時に優しくアドバイスをいただいているのが山根真知子さんです。

先日、法人設立から 5 年を経て、原点を見直すべく、お話を伺いました。

一歩を踏み出したからわかること

——山根先生は当時から現在まで、多くの社会的起業や NPO 法人の立ち上げ支援に関わっていらっしゃるんですね。

山根 (以降、敬称略) そうですね。地域の課題解決に注目して事業を始めようというのはやはり女性が多く、また、女性の社会進出が当たり前になるとともに多くの方が活躍されるようになりました。「手作りジャム」で起業した方や子育て支援の NPO など、これまで 50 件以上の起業・設立のサポートをしてきました。

——私たちが「NPO 法人をつくりたい」とお伝えしたとき、どう感じられましたか？

山根 皆さん、それぞれがバラバラに違う方面で仕事をしているので、正直なところ、どうなるのかな？とは思いました(笑)。でも、根本的なところでは「女性の活躍を支援する、活躍する場を作る」という目的は一致しているので、まあ、大丈夫かなと思いました。

新しく何かを始めるということは、何かしらのリスクがあることです。さんざん考えて悩んで、実際にはやらないという方も多いです。

ただ、思い切って始めてみないとわからないこと、始めたからこそわかること、答えが出ることはありますね。そういう一歩を踏み出せるかが大きな分かれ道です。多くの方を見てきて、ある程度の準備を重ねたら、ぜひ一歩を踏み出してほしいと思います。

——NPO 法人の立ち上げでは、最低 10 人の会員が必要です。私たちの周辺でも「10 人集めるのが難しい」と聞くことがあります。

山根 核となる人が 3 人ほどいれば活動をスタートさせることはできます。

その 3 人が自分の周りに声をかけて、2 人ずつ集めてきたら 9 人でしょう？

そのぐらいの人を集めることができないのでは、NPO の活動としては難しいということになります。

そして、人が集まらないのは、どんなテーマであれ、その活動が魅力的にアプローチできていないからかもしれません。

例えば、社会課題には暗い苦しいテーマもあり、それに向き合う NPO 活動もありますが、そうしたテーマであっても「やりたい」「やらなきゃ」「やってみよう」と人を惹きつけ、共感を呼ぶアプローチができて、活動している NPO 法人はたくさんあります。

NPO 法人は「人の力を集めて活動する」という点が企業の資本金を集めて設立することと異なります。それが、人が集まって活動する NPO 法人ならではの特徴と言えます。

人が入り込める上手な余白づくりを

——「人材不足」が私たちの課題ですが、アドバイスをいただけますか。

山根 思わず手を出したくなるような、お手伝いしたくなるような「余白」が活動の中にあるか？ということが大事だと思っています。

自分たちだけで、運営をきっちり完璧にしようとすればするほど、他の人は「お手伝い」や「参加」がしにくくなるものです。

「ここを手伝ってください」「ここを助けて」と周囲に言えるように、活動の中に「余白」を作っておくことがとても大切です。

——フェスなどの参加者さんに企画段階や準備からもっと力を借り、手伝っていただくなど、巻き込んでいく感覚や仕掛けが大事ですね。

山根 私は「コミュニティワーク」といって地域課題解決を担ってくれる人材を育成する研修もやっています。その講座が始まる時、来場者に「すみませんが机を一緒に並べてくださいますか」と声をかけることがあります。

教室に入ってきたところで、準備から手伝ってもらおうのですが、参加者によっては「講座の準備もできていないのか」「私たちに机を並ばせるのか」と怒る方もいます。でも、人数は少ないけれど自発的にどんどん並べて、「次は何しますか？」と聞いてくれる方もいます。

私たちは、そうした自発的に動いていただける方に、仲間になってほしい。

次の段階ではそうした自発的な方々との関係を大事に育て、「今度はこれをやりましょう」「ここを手伝ってもらえますか」と声をかけていきます。こうして参加者が増え、活動が進んでいくイメージです。

——確かに、普段の生活の中で私たちは「お客さん」であること、消費者としてサービスされる側の立ち位置に慣れてしまうことがあります。行政に対しても不満を言うだけ、というか…。でも、本来、地域社会って自分たちが主体で動いていくことが重要ですよ。ある面ではサービスを受けるけど、ある面では何かを提供するというか。

山根 NPO 法人を立ち上げて、やってみて、どうでした？

——自分たちで自主的にできるのが楽しいです。自分たち主体で考えて、行政に提案していくこともできるし、実際には苦しいこと、大変なことが多いのですが、やはり自分たちがやりたいことをやっているの。思い描いたことが徐々に形になっていくことは楽しいです。ラクじゃないのですが、その先に、というか、その後に「楽しい」を味わえると感じています。みんなに聞いたわけではないので、私だけかもしれませんが(笑)。

これからやりたいこと、今だからやりたいこと

——これから山根先生がやってみたいことを教えてくださいませんか。

山根 これまで多くの法人の理事や役員などを引き受けてきましたが、最近は少し整理して、自分の地元で何かしたいですね。地域に根差した活動で自分が本当にやりたいことを厳選して力を入れていきたいと思っています。

——山根先生が地元でどのような活動を始められるのか、とても興味があります。そのときは、私たちの法人でも何かお手伝いさせていただけたらうれしいです。

今日はありがとうございました。

.....

私たちの年代は、子育ては一段落でも、自分の体調不安や家族の病気、介護など、私も含めて、誰かしらいつもそんな状況を抱えています。

そんな状況でも、誰もが今が一番若い！（笑）なので、可能な範囲で動いていきたいです。しかもコロナ禍で、さまざまに苦しい状況の方は多いかもしれません。

こんなときこそ、それぞれの小さな「楽しみ」を大事に育み、毎日ちょこっとずつ味わいながら、小さな幸せを糧に、日々を過ごしていきたいと思います。

藤原寿子



久々にお会いした山根先生。※撮影時のみマスクをはずしていただきました。